政治経済講演會講演集

第九十三輯

昭和十三年

一、生命のある宇宙

ヤングハスバンド著

二、人間と宇宙

ハンス・ドリーシュ著

國政研究會

群馬県立図書館
中島文庫
七貳〇〇

7200

注意事項
○資料は大切に扱いましょう。
○資料は転貸借はお断りします。
○15日間の期限に必ず返して下さい。
○資料を汚損または紛失した時は同一の資料又は相当代価を弁償していただきます。
群馬県立図書館
前橋市日吉町一丁目14-8
電話（0272）㉛3008番

No.

一三、八、一八。

ヤングハズバンド著

一、生命のある宇宙

Younghusband; The Living Universe.

ハンス・ドリーシュ著

ジョンストン訳、

二、人間と宇宙。

Hans Driesch; translated by W. H. Johnston; Man and the Universe.

No.

報告内容、

第一章、物質的宇宙、

第二章、生命の発生とその進化、

第三章、宇宙精神、

第四章、宇宙の一員としての人間。

人間は宇宙の一部であり、反対に宇宙はまた人間の一部を形作つてゐる。このためにこそ人間は必然的に熱心に宇宙に就て知りたかるのである。従来宇宙を説明するに当つて西洋に於ては主として科学的に説明し、従つて物質を中心にして宇宙を説明せんとして来た。これに反して東洋に於ては精神を中心にしてその立場より宇宙を説明してゐる。か書れ宇宙を哲学的或は精神的に解明せんとするものであつて、生物学的或は自然科学的に説明せ

んとするものではない。

~~第一編 科學の基礎としての宇宙論~~

第一章 物質的宇宙

近代の天文學の書を繙いてみる人は誰でも尨大な宇宙、即ちも多くの星辰の數、距離、年代に就て驚かされてしまふ。それと同時にそれら星辰を形作ってみる極小の部分が絶へざる運動をなし、一つの体系的な全体を為

してゐるのを見て誰でも驚ろきの眼をみはる。

先づ星辰の數に就てみてみよう。天文學者ヂーンズに依れば、宇宙に於る星辰の數は恐らく全世界の海岸に於る砂の粒の總計ほどもあり、或は亦ロンドンの塵埃の粒の總計に略等しいほどあるであらうといふことである。全くの所、星辰の數は我々の力では到底計算することができないほど沢山あるのであつて、空の晴れた夜、我々の肉眼で見えるのはそのう

ちの僅か三千にすぎないのであつて、その數は或々の想像も及ばないほどの數である。

次に此れら星辰の各々は砂の粒ほどの大さではなくて、測り知るべからざるほどの大きさを持つたものである。ジーンズに依れば二三の星辰のみが略ゝ地球と同じほどの大きさであつて、その他の大多數の星辰は地球の幾百倍或は幾千倍もの大きさがあり、或るものは地球の幾百万倍ものがある。アンタレスといふ星辰は三十九億万哩もの直径があり、

それは太陽の直径の四五〇倍である。而して太陽は地球の直径の百倍であり、地球の容積の百万倍である。そして地球の重さの三十八万倍である。そして大低の星辰は太陽の重さの十分の一か或れは十倍の重さがある。

次にまた夫々の星辰は測り知るべからざるほどの距離或は間隔をおいて存在しておる。我々人間に最も近い距離にある星辰ですら非常に離れておるので、一秒間に十八万六千哩の速力で走る光でさへ我々に達するには四ケ

年と三ヶ月かゝる。［であるが］それは百万哩の二千五百万倍も我々より距ってゐることになる。望遠鏡を通して見ることができる星辰のうち最も遠いものは、一秒間に十八万六千哩の速さで走る光が我々に到達するまでには一億四千万年もかゝる。空に見ることができる星のうち我々に最も近いものは百万哩の二千五百万倍の距離にある。恐らく夫々の星辰の相互の距離もこれ位あると見做すことができる。何れにしても宇宙は全く測り知るべからざるほど大きなもの

國政研究會

である。
次に宇宙は決して死んだ運動しないものではなくて絶へず運動し生成発展して居るものである、即ち宇宙は時間或は年代を持つて居るのである。この星辰の年代、時間は亦驚くべきものである。地球の年代は僅か二十億万年ほどであるが、太陽の年代は八〇万億年である。
次に宇宙に存在するものはすべて微分子から成り、この微分子は二つ若しくは二つ以上

國政研究會

のアトムより成り、アトムは一つ若しくは一つ以上のエレクトロンを含み、エレクトロンは一つ若しくは一つ以上のプロトンを含んでゐる。即ち宇宙の極少部分は何れもプロトンから成り立つてゐる。言ひ換へれば各部分は我々の眼に見えない同じものから出来上つてゐるのである。即ち星辰、太陽、地球、一切の物質、アトムはすべてエネルギーから形作られてゐる。即ちエレクトロンとプロトンとは陰電気及陽電気のエネルギーの合一されたエネルギーであつて、その両者が

基礎になつて宇宙の一切が形作られてゐるのであつて、エネルギーこそ全宇宙の根源であり、基礎である。

このエネルギーは太陽の光線及び熱となつて地球上に生命を與へ、一切に生命を與へる原動力となる。エネルギーは絶へず自己運動をして、宇宙の生命を作り出してゐる。

次に宇宙は一つの体系若しくは有機体を形作つてゐるのであつて、星辰とかアトムは一つの大きな全体に結合されてゐて秩序ある体

系をなしてゐる。一切のものは全宇宙の中に秩序よく結合されてゐる。この地球も勿論全宇宙の一部分であって、他の部分と関係し合ってゐるのである。決して独立に存在してゐるものではないのである。約二十億年前太陽の周囲に非常に接近して他の星辰が通過したために引力の力で、太陽が灼熱した霧となって多くの破片が飛び散り、この破片が後になって冷却して凝り固って遊星となったといはれ、その時の破片の一つがこの地球なので

る。それ故に我々人間が住んでゐることの地球と同じ遊星が宇宙の何処かに存在することもあり得るのである。

かくの如く、広大な全宇宙が組織立った美しい有機的な全体を成してゐるとすれば、我々はそこに全宇宙を支配する或る精神、又は神の力の始まるのを考へざるを得ない。この精神があってこそ全宇宙は統一を保ち得ると見ざるを得ない訳である。

第二章、生命の発生とその進化

科学者に依れば宇宙は死滅しつゝあり、何億万年かの後には宇宙は死滅して冷却したものとなるといはれる。然し眼を轉じて此の地球を見たとき、事態は全く異つてゐることがわかる。即はちこの地球は後退し退嬰しつゝあるのではなくて反対に進歩し進化してゐることがわかる。

地球が太陽から飛び散つて出来上つた当時

はこの地上には何等の生物も生存しなかったであらうが、然し根源的な生命の芽ともいふべきものがあつたに相違ない。全然の無からは生命が生じることはできないからである。即ち地球が発生して後に、地球上に水素と酸素の原子が出来、それが化合して水となり、そこに水が出来上り、次に海と山が出来上り、次に海に住む魚類が発生し、山に住む動物とか鳥とかが発生し、一般の有機物、生命のあるものが発生し、人間が発生

したのである。即ち地球発生と共に存在してゐた根源的な生命体は生成する力を持つたものであり、それが二つに分れ、その二つのものが亦夫々二つ宛の生命体に別れて長い間に今日の色々な生物が発生し進化して来たのである。然しかゝる生物の進化発展にはダーヴインの云つてゐるやうに自然淘汰が行はれてゐるのであつて、発生した生物が夫々皆何れも生存することができるのではない。自生存競争のため或は亦生活の條件が変るために生

物は自ら淘汰され、弱いものは死んで行き、選ばれた強いもののみが進化発展して行く。このやうにしてアミーバから色々な高等の生物が生じ、猿が人間に成ることも考へ得られるのである。人間が発生したのは百万年前である。

次に、一旦生物が地球上に発生した場合、それを進化し発展さして行くものに愛なるものがある。かゝる創造的愛とも云はるべきものは一切の生命を進化さす原動力、或は推進力とな

るものであり、宇宙を形成し発展さして行く動的な活動力となるものである。「この創造的な愛に依って一切のものは結合され統一されて発展進歩して行く。一切の生物又は動物の雄と雌、或は人間の男女の間の愛、或は亦母親の子に対する愛、又子の母親に対する愛は皆かゝる創造的愛の現れである。要するに宇宙を指導し進化発展さす為の重要なる動因となるものがこの創造的愛だと云へる。それが若しなければ生物又は人間は滅亡し、それと共に宇

無くなつてしまふであらう。我々人間が生れて来たのもこの創造的愛のお蔭なのであつて、創造的愛は生命そのものが発生すると同時に生じて来たものであり、従つて創造的愛は生命そのもの、本質をなすものであり、そればかりではなく生命そのものが創造的愛だとも云はれ得るのである。すべての人間が愛情を持つてゐるのはこの為にも由るのである。人間は何かのもの異性を愛し、又他の何らかのものからの愛を受入れる性質を持つ

13. 6. 50.000 ォ納

てゐるか、これは人間の天性であつて、この天性を持つて人間は世界に生れて来、かゝる天性の為に幾百万年もの間生成発展進化して来ることが出来たのである。

次に、この創造的な愛が、世界に対する神秘的な愛が生じて来る。この神秘的な世界愛も亦宇宙を進化さす力を持つてゐるのであつて、神秘主義は決して幼稚なくだらないものではなくて、世界を動かし進展さして行く力を持つてゐる。人間は神秘主義を信ずることに依

つて人間精神の力を自覚し、このことに依つて今日に到るまで進化発展して来たし、世界を動かして来た。人間は神秘主義に依つて自分の力を知ることが出きるのである。このやうにして神秘主義は全宇宙を動かし進展さす力を持つてをり、将来も神秘主義に依つて世界及び宇宙は進展して行くであらう。

以上述べて来た色々なものが原動力となつて宇宙は常に進化発展して来たのであり、将来も進化発展し続けて行くであらう。であ

るから決して宇宙は死滅しつゝあることはこの
ないのである。

~~第三編 宇宙の推論、~~

第三章、宇宙精神

前述の如く、地球が太陽から分離し、そして
地球上にあつた或るアトムが複合して生命が
発生し、生成し、拡まり、発展して、色々な
植物、昆虫、魚、鳥、動物、人間が発生して

来たとすれば、我々はこの事実を如何に説明すべきであるか。このことは或る人々が説くやうに偶然に起つたのではない。地球が太陽から分離した後に、それは或る温度にまで冷却し、次に海と水中にある塩分と水上の大気中とにあるガスとこの三つが結合して生命の原形質を発生せしめたと見るべきであつて、かゝる結合は偶然に行はれたのではなくて、或る眼に見えない何ものかに導かれて発生して来たものと見るより他に仕方がない。即ち或る眼に見え

ない働きがあつて、それがアトムを導き指導して生命の原形質が作られたと見るべきである。それではこの眼に見えない働きは何であり、どこからそれが発生して来たのであらうか。

（天文学者）ジーンズに依れば、宇宙は大きな機械といふよりも寧ろ大思想に似たものであつて、物質界の創造者及び支配者（は）精神であると見倣すべきであるといつてゐる。即ち一般事物（及び宇宙）の進化の（過）程の背後には精神（又は叡智）が支配し指導し

てゐると見做すべきであらう。もしもエレクトロンとプロトンに依つてエネルギーが発生し、そしてアトムが発生し、このアトムが復合して色々なものが生じ、それらすべてのものが規則正しい運動をしてゐるとすれば、その背後にそれを支配し指導するものとして最高級の叡智、或は全能の意志が働いてゐると見なければならぬ。かくして精神又は叡智なるものは宇宙の要素の一つであると見なさなければならぬ。そしてこの精神が生命の原形質を

発生せしめ、亦進化せしめると見るべきである。そしてこの精神は数学及び芸術の能力を持ち、全宇宙を秩序よく美しく保っていると見做すべきである。

次に宇宙は一つの有機体をなしているのであって、各部分は宇宙の一部を反映し夫々意義を持ってそして全体と関係し、亦部分相互に関係し合っている。このことよりして人間のみならず各部分は夫々小宇宙を形作っているのである。であるから各部分が持っている要素は全体としての宇

宙も持つてゐる筈である。このことよりして宇宙は生命と意識とを持つてゐるといふことがいはれ得る。であるから宇宙は一つの生命のある有機的な精神的宇宙であるといふことができる訳である。また宇宙にとつては進化発展することが善であり、而して宇宙が今日に到るまで何千万年かの間進化発展して来たとすれば宇宙は善を求めて進化発展する精神的な生命のある有機体であるといふことができる。

次に宇宙精神は神の精神ともいはるべきも

國政研究會

のであつて、神としての宇宙は一切のものを保護し、反対に一切の生物は人間をも含めて神としての宇宙に仕へ奉仕しておるのである。我々人間は夫々この世に生を享けることに依つて宇宙の一員と成り、そして夫々神としての宇宙に奉仕し、宇宙も進化発展せしめることに尽力しておるのである。

以上のやうに宇宙を精神と見、また生命のある宇宙と見做すとき、その宇宙から生命が発生して来ることには何ら不思議もない。

丁度母体から生命体が発生するのと同じである。このやうに宇宙の背後に神の精神が働いてゐると見、また宇宙は生命のあるものであると見做すことに依つて、初めて生命の不可思議は自ら解決されることができる。であるから宇宙が何らかの形で存在する限り生命は何時までも存続するであらう。宇宙はその限り死滅するものではない。

次に前述の如く、宇宙の各部分は小宇宙を形作つて全体に従属してゐるのであるが、夫

眼に映る宇宙の

々の部分が等しい價値を持つてゐるのではなくて、その間に上下の區別があり、そしてそれらが相集つて世界秩序を形作つてゐるのである。であるからすべての部分が最高の價値を持つことが許されないのである。このことは宇宙の法則であり、規則である。價値及び意義の少いものは價値あるものゝ下に從屬すべきである。そして價値あるものは價値少きものを守護し高めてやるべきである。このやうにして全宇宙は一つの秩序ある美しい生きた全体を形作つ

てゐる。そしてこの全体としての宇宙は宇宙的精神に依って支へられ、生命を與へられてゐるのである。このやうに全体と部分とか相助け合って働き、そしてそれに依って宇宙は進化発展してゐるのであり、絶へず運動し発展してゐるのである。この限り全宇宙は決して静止してゐるものではない。それはリズミカルな過程を辿って絶へず進化発展してゐるものである。尤も宇宙の諸々の部分のうち或は死滅して行くもののあるであらうが、然しそれは

No. 3。

全然死滅してしまふのではない。何れかの形で生存して行く。よし死滅してしまったにしても、それは宇宙全体の進化発展の為の犠牲となって死滅して行くのだと見るべきである。かくの如く部分は死滅しても、それに依って却って宇宙全体は進化して行くのである。或は死滅する部分は宇宙全体に奉仕する為に死滅して行くと見るべきであって、亦このことに依って死滅する部分も救はれ、永遠に生きて行くとも見做されるのである。何れにしても絶へず

國政研究會
13.6.50.000 ォ納
10×20

、より高い価値を持ったものが現はれ栄えて行くことに依って、そして価値少きものが死滅して行くことに依って宇宙は進化して行くのである。かくして宇宙の進化〔発展〕の過程は動的なリズムを為してゐる。要するに宇宙全体は神的な精神であり、各部分特に我々人間はその神的な精神の代理人であり、奉仕者であり、使徒である。

第四章、宇宙の一員としての人間、

以上述べて来た宇宙の説明に依って略と人間に関する説明も明らかにされてゐる訳であるが、人間も宇宙の一員として生存してゐるのであって、前に述べた生物の発生及びその進化発展と同じく発生し進化して来たものであって、宇宙生命の根源である生命の原形質から発生して来たものであって、従って生きた神的な宇宙精神に依って支配されてゐるのである。

No. 33

その限り人間は宇宙の他の諸々の部分と同じく宇宙精神に奉仕し仕へるものであり、その代理人であり、そして使徒である訳である。宇宙精神に仕へ、宇宙を進化発展せしめることが人間の義務であり、またこのことに依って人間は永遠に生きて行くことができるのであり、不滅となり得るのである。よし肉体的に死ぬにしても、そのことに依って却って全体としての宇宙を発展せしめることになるのであり、全体的に見れば宇宙を生かすことになるのである。簡単にいへば

國政研究會

宇宙を永遠に生かし存続せしめ進化発展せしめる為に人間は肉体的に死んで行くと見ることができる。であるから狭い立場に立つて個人としての人間より見れば、個人は死んで滅んで行くのであるけれども、広い立場に立つてこれを宇宙全体より見れば人間は不死であり、不滅であるということができる。即ち人間は宇宙に新しい生命を与へんがために死んで行くと見ることができる。それは丁度植物が花を咲かして実を結び枯れて行くのと

同じである。一寸見ればその植物は死んで行くやうに見えるが、然し本当は種子を残して死んで行くのであつて、その種子は地上に落ち再び新しい生命を作り新しい植物となつて生長し存続して行く。であるから人間は新しい生々とした溌溂たるヂエネレーシヨンを作り、人類全体を永遠に存続せしめる為に死んで行くと見ることができる。その限り人間は宇宙が存続する限り存続して行き、宇宙を発展せしめるものとなる訳である。殊に人間は他の

生物及び動物と違つて意識、特に道徳的意識を持つてをり、良心と精神とを持つてゐる。それは生物中の最高のものであつてあるから眞た宇宙を発展せしめるものは人間であり、またそれが人間の役目でもあり、義務でもある。眞に宇宙の本体を認識し、自覚するものは人間をおいて他にはない。我々人間こそ地球上に於て神の為に戦ふ戦士であり、精神の為に戦ふ戦士でなければならぬ。かくして人間は先づ第一に宇宙を信頼し、人間を支

持してくれるものは宇宙であるといふ確信を持たねばならぬ。

次に人間は物を見る眼界が狭くてはいけない。宜しく自分の周囲は広大な宇宙そのものであると考へ、それを中心に物事を考へて行かなければならぬ。

次に人間は生命のある宇宙より生れ、そして宇宙の本質を受け継いでゐるが故に、より善き生命を求め、悪を斥け、善を求めなければならぬ。

次に人間は、宇宙が死滅して暗黒の冷却し

13. 6. 50.000 ォ納

たゞの無に成るといふ悲観的な考へを持つことなく、心にあ喜びを以て前進すべきである。かくの如くすることに依つて初めて人間は宇宙と共に進化発展して行くことができるのである。そして心の中にしつかりした確信も出来、精神的な人間に成ることができ、永遠不変の世界秩序に従つて物事に動ずることなく生き、発展して行くことができる。精神的な永遠不変の世界秩序を知ることは人間が生きて行く為の要諦である。

群馬県立図書館
0707200-2